

【一般演題3】 第13席

「『黄帝内經』における胃気について」

京都 稲垣 元

「胃」は五藏六府の海といわれ、『内經』中でしばしば脾とともに中心的な扱いをなされている。「胃」は後天の気を生成する上で、人体の気と水穀の気とが化合できるように変化させる働きを持つ藏府である。このように「胃」の語は藏府の気という意味での用法は勿論の事だが、加えてほとんどの場合、診脈用語として用いられることなども分かった。

後代になり隆盛した金元医学の四大家の内に『脾胃論』等の著書で、補土派と称される李東垣がいる。この流派の医学は、江戸の日本漢方・鍼灸、多くの流派にその影響を与え続けた。

以上のように「胃」の概念は一流派をなすがまでに理論的展開がなされたことが分かる。この「胃」の概念を『黄帝内經』を中心に見てみようと思う。